



## 主の昇天 (マルコ 16:15-20)

私たちは聖堂を宣教の拠点にする

主の昇天の祝日です。弟子たちの行動を取り上げながら、私たちも何かを学び取ることにいたしましょう。

イエス様が天に昇られたときの様子を、私たちは二つの朗読から聞きました。第一朗読の「使徒たちの宣教」と、「マルコ福音書」です。これら二つの朗読では、弟子たちの様子は明らかに違っています。

第一朗読では、白い服を着た二人の人が、弟子たちに次のように言っています。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる」(使 1・11)。福音朗読では、「弟子たちは出かけて行って、至るところで宣教した」(マルコ 16・20)となっています。かたや、天を見上げてぼんやりと立っている弟子たち、かたや早速宣教に出かけて行った弟子たち。いったいこの違いはどこから出てくるのでしょうか。

私は、それぞれの書物を書いた著者の気持ちが、このような違いになっていると考えます。「使徒言行録」を書き残したルカも、福音記者マルコも、12人の弟子のメンバーではありませんでした。彼らは直接の弟子ではなくて、使徒たちのそのまた弟子だったのです。

そうすると、イエス様が天に昇られたときの様子は、どのように話を聞かされたかですぐいぶん違ってくることでしょう。おそらく、二人とも忠実に聞いたのでしようが、ルカはそれをじかに書き記し、マルコは聞いたことを踏まえて、手を加えたのだと思います。事実上、使徒言行録にあるように、ぼんやりと天を見上げていただろうということです。

ではなぜ、マルコ福音記者は、弟子たちがさっそうと宣教に出かけたかのように書いたのでしょうか。それは、この福音書が、新しく信仰の道に入った人を教育するために書かれていたからです。マルコは、新しく信者になった人たちに、あなたたちも同じようにしなさいと勧めるために、「早速宣教に出かけて行った」という形にまとめたのです。

もちろん、使徒言行録にあるように、ぼんやりと眺めていたことは推測できます。たとえば、愛する配偶者を失ったときや、両親を失った子供たちが、「さあ亡くなった人を惜しんでも帰ってこないから、私たちは次にどうしたらよいか考えましょう」と、すぐに次の行動に移れないのと同じです。最終的にはそうするのですが、それにはある程度の時間が必要なのです。マルコは、そのことを踏まえて、出かけて宣教したと書いたと思われます。

このような事情を考えて、弟子たちの姿から何かを学ぶことにしましょう。イエス様はご計画の通り、ご自分が元いたところへ帰って行かれました。それは弟子たちと別れるためではなくて、弟子たちが自分の足で歩いて行って、イエス様のみわざを続けていくためです。三年間見守ってきたのだから、あとは私に信頼をおいて宣教に行きなさいと、堂

々と弟子たちを送り出してくださったのです。

もし弟子たちが、三年間の教育と、あとでお遣わしになる聖霊の働きで十分に満たされないとしたら、イエスはまだしばらく残ってくださったことでしょうか。もう弟子たちは、自分で出かけて行くことができると、イエスが判断してくださったので、天の父のもとへ戻られたのです。

私たちはどうでしょうか。学校教育を終え、社会に飛び込み、結婚生活の一步を踏み出し、教会でもそれぞれの役を持ったりします。「さあ、あなたの出番だよ」と言われているのに、ぼかんとしていることはないでしょうか。役職をいただいたのはいいけれど、ただぼんやりとして時を過ごしていることはないでしょうか。そんな姿では「なぜ天を見上げて立っているのか」と、注意されはしないでしょうか。

献堂百周年のその日が来ました。もちろんこの日がゴールではなく、百年の価値ある聖堂をこれから守り続けていきます。「百年も守ってきました。私の責任はもう終わりです。」「私ではなくて、ほかの人にお願ひしてください」と、現実から目を背けないで欲しいと思います。私たちは先祖が見ることのできなかつた歴史の瞬間の目撃者なのです。私たちだけが、百周年という歴史的瞬間を語る事ができるのです。

「田平の人たち、なぜ上を見上げて立っているのか」と、指をさされることのないように、一致して当日の行事とこれからの歩みに加わっていきましょう。そのための恵みを、ミサの中でお祈りいたしましょう。

聖霊降臨(ヨハネ 20:19-23)